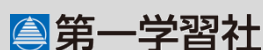


大学入学共通テストの 試行調査について

東京都立五日市高等学校主幹教諭 佐々木純



① 本稿のねらい

本年 11 月に「大学入学共通テスト」試行調査(プレテスト)の 2 回目を実施された。初回の試行調査において生徒の歴史的思考力を評価するために「大学入学共通テスト」では多様な資料を活用した設問を出題する方向性が示された。それ故、現行のセンター試験と比較すると、「大学入学共通テスト」の設問は、解答に史資料グラフなどの読み取りが必要な設問の半分以上あり、歴史用語のみを空欄補充で問う設問や歴史用語だけで誤りを作る正誤問題が殆ど出題されないことが想定出来る。このような出題傾向から現行のセンター試験向けの学習指導では「大学入学共通テスト」に対処する能力を生徒に身に付けさせることが必ずしも十分ではないことになる。そこで、本稿では出題の特徴に応じた解答処理の方法論だけでなく、設問に潜在するメッセージなどから「大学共通テスト」に向けた授業改善の方向性を提示してみたい。

② プレテストの特徴について

① 大学入試センターが提示したプレテストの趣旨

平成 30 年 11 月に大学入試センターが示した「各教科・科目等の作問のねらいとする思考力・判断力・表現力」によると日本史を含む歴史において「問いたい」力とは、歴史事象に関して、時系列的にとらえる力や複数の歴史事象を比較して事象相互のつながりや共通性と差異をとらえる力、また、資料から読み取った情報に関して、歴史事象の関わりを類推できる力や資料から読み取った情報や習得した知識を活用して歴史事象の展開(推移や変化)について考察できる力、さらに、習得した概念を活用して現代的課題に応用できる力があげられており、これら大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力・判断力を育成することがプレテストに対応した授業の目標として求められていると思う。

② 現行のセンター試験との比較

前記の趣旨に基づき、従来のセンター試験に顕著な知識理解の習得を測る設問の他に、知識の活用を測ることを通して思考力・判断力を評価する設問が特徴的である。また、新たな解答形式として、正答として当てはまる選択肢を全て選択する設問、正答の組み合わせが複数ある設問など多様な形式で出題されているので、センター試験のように、出題のある程度のパターン化は想定しにくい。また、設問数にあまり変化はないが、思考力・判断力を評価するため、読み解く史資料の増加や問題設定の複雑さに起因してページ数は増加している。つまり、設問が長いため、問題の意味(出題者の意図)を捉えることに時間を要するので、短時間で根拠を踏まえて題意を的確に把握することが求められていると言える。

③ プレテストの前年度と本年度との出題の比較

出題パターンは想定しにくいものの前回の設問と今回の設問の異同を確認することで「大学入学共通テスト」の出題の方向性が見えてくる。前回の出題を踏襲した問題として、時代について異なる評価を考察させるために歴史の見方の多様性を問う設問や正誤判定に組み合わせを複合させた問題が意識的に出題されているので、これらの問題形式が大学入学共通テストの特色的出題となる可能性がある。

本年度から新たに出題された問題から、今後の出題に影響する問題を探ることができる。特に、資料問題は前回の3倍に増え、地図や写真、統計データから思考させる問題だけでなく、資料の精読を要求する問題が増加したことに留意すると、史資料の特性に合わせた情報の的確な読み取り方を求められる設問が出題されると推定される。

このような問題傾向に対処する能力を身に付けさせる授業について、プレテストの設問の場面設定が授業改善の在り方に示唆を与えてくれる。史料から得られた情報と授業で学んだ知識を活用して仮説を立てグループ学習や発表形式による生徒同士の意見交換を通じて、歴史に関わる事象を多面的多角的に考察することで歴史の見方を育む学習の過程が提示されている。

④ 設問について

プレテストの典型例を取り上げ、設問に込められたメッセージから授業改善の方向性も提示したい。

■ 第1問

前年度は成人年齢引き下げや18歳選挙権という高校生の主権者教育を踏まえた意志決定がテーマであった。本年度は災害が多い年であることを意識したのか災害と人々の関係史とその対極にある開発と人々の関係史という二つのテーマで同じ時代を捉える問題である。生徒の社会生活から、現代と切り結ぶ課題を設定し長い時間軸の中で探究していく場面が設定されている。

問1は複数の事象を比較して共通性・差異を捉えさせる設問で、略年表から目的に応じた情報を読み取る技能を使用して解く。問3は知識理解の設問だが、カードを用いてクラスの人たちに提示して意見を求め、不適切な内容の指摘を受けて検討を進める学習の場面設定に留意したい。問4は学習指導要領の「歴史と資料」を踏まえた設問で、テーマに則して二つの資料の共通性を読み解く。文化財を教材として文化財の役割や地域に伝えられてきた価値を考察する授業の参考になる。問5は立場の異なる複数の資料から読み取れた情報をまとめる学習の場面が設定されている。同じ資料でも他に関連させる資料が異なると歴史の見方に変化が生じること多面的多角的に考察する授業に活かしたい。問6は各時代の

政治と社会の関係性の推移や変化について理解を問う設問だが、協働して学習したことをきっかけに、さらにテーマについて調べて新たな気づきに到る学習の展開にも注目したい。

■ 第2問

古代官道をテーマとして資料からその特徴を見出し、国家制度との関係や社会的影響を考察する問題。問1は写真や地図などのビジュアルな資料を読み解くだけでなく、その読み解いた情報の理由を考察させる設問。センター試験では資料を読み解く段階に留まるが、大学入学共通テストではその背景まで考察させているので、授業では「なぜ(どのような要因で)、そのような景観に変化したのか」など生徒に理由を考えさせる発問を意識したい。問2は遺跡の変遷の表と文献資料を組み合わせる制度の推移の要因を正誤判定させる設問。遺跡の変遷の中に文献資料を位置づけて考えれば解答は容易であるが、遺跡と文献資料を組み合わせる事象を具体的にイメージさせる授業実践の必要性に留意したい。複数の時代に跨る複合遺跡を教材として使えば社会の推移を考えさせることもできる。問3は、地図から読み取れる情報の正誤判定をしてから、正しいと判断した情報に適合する歴史的事実を選択する思考力と判断力を要する新傾向の設問。また地図の方位を通常と逆転させることで、視点を変え立場を変えた歴史観が展開する問題設定に留意したい。この手法を授業で講じると歴史の多様な見方を育むことができると思う。

■ 第3問

中世に焦点をあて、世界からの影響を踏まえ、時代を概観し社会の特徴を捉える問題。生徒が書いたレポートを題材としているが、授業のどのような場面で活用しているのかは判らない。しかし「歴史の見方には様々なものがある」という観点からの設問が含まれているので注目したい。

問2は生徒の立論に対する反論の成否を問う設問。各時代の対外関係を理解していれば、解答は容易だが、テーマに則して通時代的学習をすることや反論を想定して立論する探究学習を心懸けたい。問3は時代を観る視点を対外的影響から国内に視点を変えて、資料から読み取れない内容を指摘する設問。資料と選択肢の文の対応関係を確認すれば解答は可能だが、「他の見方がないのか」などの問いに活かして、視点を変えて当該社会の特徴を探究する授業を構成したい。問4は同じ時代の二つの評価の根拠を問う設問。根拠を資料ではなく時代の様相を表す文章に求めているので解答は容易だが、同じ時代でも複数の評価があることを踏まえて、社会的立場の違いなど多面的多角的視点で時代の特徴を生徒自身にまとめさせる活動も勘案したい。

■ 第5問

Aは1880年代の経済状況についてグラフから読み取らせる問題、Bは日清戦争後の世界と日本について風刺画から読み解く問題。前年度の第6問に出題傾向が似ている。Aはフローチャートで事象の背景、原因、結果、影響を生徒がまとめた場面設定である。教員が事象の因果関係を理解させるために使用するフローチャートを、生徒が学習内容を表現する手段として使うことも一考の価値があることを示している。問2は政府の財政政策が国民生活に与えた影響を表したグラフではないものを選択させる設問。既習の知識を活用し目的に応じた資料を選択することは容易だが、授業では社会的事象の関係や推移をグラフなどで可視化して認識させるようにしたい。Bの問4はリード文の風刺画から情報を読み解

き、リード文と同じテーマで描かれた風刺画資料を探す設問。設問では生徒が風刺画から読み解いた情報をメモにまとめた場面設定になっているが、ビジュアルな資料から情報を引き出す場合、恣意的な読み取りにならないように、構成要素の意味するものを確認する必要がある。資料の特性に則した読み取り方を学ばせながら資料の読解力を身に付けさせていくことが肝要である。Bの問5は日本の動向が世界に与えた影響について、グラフ、地図、表を複合させて全て正しい選択肢の中から設問条件に適合する項目を複数選ぶ設問。設問条件を基準に選択肢と資料の組み合わせを対応させて検証すれば解答できるが、授業では、一つの資料を読み込むだけでなく、他の資料と複合させて社会的事象を捉えていくことが求められていると思う。

③ 「大学共通テスト」に向けた授業改善

① 指導計画及び授業構成

授業で獲得した知識を使用して、社会的事象の特徴や問題を説明できるようになることが「大学共通テスト」に対処する目標の一つと考えられる。この目標を達成する指導計画として知識を獲得する時間と探求の時間で単元を構成することが有効だと思う。基礎・基本を習得させた上で、「なぜ」の問いに基づく授業を構成し、「どうして」という因果関係を求める学習課題を単元の中心にすえることで歴史的思考力を育成することができる。さらに、資料を活用し探究の成果を論述したり討論したりする活動で説明のための概念的知識を獲得させることができる。それ故、この活動を通して、用語に関する知識ではなく、事象の特色や意義に関する理解を問う設問や事象の相互関係に関する理解を問う設問に対応ができる。次期学習指導要領では、生徒自身に仮説を立てさせ資料を活用して多面的多角的に追及させて事象の解釈を表現する学習構成となる。そのため単元に既習事項との矛盾を認識させたり事象間の矛盾を発見させたりする問いを組み込むことが授業の成否の鍵となる。

② 教材及び発問

教科書の記述が何を根拠にどのように説明しているか考えさせながら読ませる仕掛けとして発問と補助教材を工夫したい。社会事象が、なぜ生じて、どのように経過し、どのような結果となり、どのような影響を与え、どのように評価されているか、因果関係について教科書の本文を分けて読みとらせるように発問を積み重ねていく。この活動の中で教科書に転載された資料、図版と本文の関連性を考えさせて記述の根拠を明確にする発問をしていくが、一義的な歴史の見方に陥りやすい問題が指摘出来る。この問題に陥らないように「大学共通テスト」が求める歴史の見方の多様性を育むために「この出来事をいくつかの資料から読み比べてみよう」や「教科書の記述以外の見方を示す資料があるのか」などの発問が必要である。しかし、発問だけでは意欲の喚起にしか繋がらないので、比較検討するための資料を教材として準備することが求められる。この教材開発に際して博物館や資料館などの資料や第一学習社で編集した図表や資料の活用が有効である。

なお、発問(問い)に関しては本年7月の「高等学校学習指導要領解説地理歴史科編」に事象の推移や展開を考察し理解を促すための問い、事象を比較し相互に関連付けたりして考察を深める問い、社会的事象の歴史の見方・考え方を働かせて考察させる問いの事例が掲載されているので参照されたい。

また、次期学習指導要領に於ける「歴史総合」を意識した日本と世界の接触に係る設問がプレテストで出題されているので、「日本の動きに対して、相手国はどのような社会的状況から対応をしたのか」などの発問を世界史の履修状況を勘案しながらしていく必要がある。この学習を充実させるためには、日本史の歴史の流れと世界史の歴史の流れを比較させて共通性と差異を自覚させる教材が必要になる。この教材開発に関しては、カリキュラムマネジメントを意識して教科会等において世界史担当の教員との意見交換を通じて作成していくことが望ましい。

さらに生徒自身はその立場に置かれた場合、どのような対応をするのかなど記述内容を自分の場合に置き換えてテキストを読ませる発問をしてみることで、生徒なりの考え方、歴史を見る目を養うことができると思う。また、この発問と関連させて、現代の視点からだけでなく、生徒自身をその時代を追体験させて、現代との対話の中で生徒自身の生き方や歴史を考えさせる教材を開発して実践すれば、生徒なりの歴史観の育成につながると思う。

4 「大学入学共通テスト」に関する今後の予定

2019年（3月まで）	・ 試行調査(プレテスト)の分析結果の公表
2019年（4月以降）	・ 実施大綱の策定・公表 ・ 出題教科・科目の策定・公表
2020年（4月以降）	・ 実施要項の策定・公表(時間割, 出願期間)
2021年（1月）	・ 「大学入学共通テスト」の実施

(平成30年12月26日)

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



 第一学習社

広島本社

733-8521 広島市西区横川新町 7-14

TEL 082-234-6800